

Survival outcomes of patients with BRAF V600E-mutant resectable extrahepatic colorectal oligometastases after upfront metastasectomy

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2025-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 貴志 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003951

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 3014 号

Survival outcomes of patients with BRAF V600E-mutant resectable extrahepatic colorectal oligometastases after upfront metastasectomy

BRAF 遺伝子変異陽性大腸癌に対する切除可能肝外遠隔転移切除症例の予後についての検討

森 貴志 (もり たかし)

博士 (医学)

論文内容の要旨

外科的に根治切除可能な大腸癌の5年生存率は比較的良好だが、遠隔転移のある StageIV は約 20% と不良である。切除可能な肝転移切除後では 35-58% と報告されており、肝転移は切除と補助化学療法が標準治療とされている。また、肝転移以外(肺、腹膜播種、リンパ節)の切除可能な遠隔転移についても同様の治療が標準となっている。BRAFV600E 変異型(mBRAE)の大腸癌は、切除可能肝転移例の 4-5% を占め、無再発生存率(RFS)、全生存率(OS)ともに野生型と比較し予後不良であると報告されている。しかし、切除可能な肝転移以外の遠隔転移症例に対する BRAFV600E 検査の役割は不明なままである。本稿では mBRAE を有する切除可能大腸癌遠隔転移症例における、治療成績を報告し、最適な治療方針を明らかにすることを目的とした。後ろ向き観察研究で、2005 年から 2017 年に当院(国立がん研究センター東病院)において、術前化学療法が施行されずに、根治的に肝転移以外の遠隔転移切除が行われた大腸癌遠隔転移症例(初回の遠隔転移切除のみ)を対象とした。対象となった 109 例のうち、mBRAE は 6 例(5.5%)、RAS 変異(mRAS)は 64 例(58.7%)、野生型 RAS/BRAF (wtRAS/BRAF) は 39 例(35.8%) に認められた。観察中央値は 39.5 ヶ月で、mBRAE 症例の RFS 中央値は 4.4 ヶ月(95%信頼区間 2.49-not available)、OS 中央値は 40.6 ヶ月(95%信頼区間 5.76-not available)であった。多変量解析では、従来の臨床病理学的因子を超えて、他の変異状態と比較して、mBRAE が RFS (ハザード比:3.15、 $p=0.035$) および OS (ハザード比 3.85、 $p=0.037$) という結果になり、生存期間への最も強い予測因子であった。さらに、mBRAE を有する転移性大腸癌に対する術前化学療法なしに転移切除をした群と切除不能症例に対して全身化学療法のみを施行した群では、OS はほぼ同様であった(ハザード比 1.01、 $p=0.99$)。したがって、mBRAE の肝転移以外の遠隔転移は技術的に切除可能であっても、腫瘍学的に切除不能と考えるべきである。切除可能な肝転移以外の転移性大腸癌症例は、技術的に切除可能であるかに関わらず、術前に mBRAE 検査を受けるべきである。